

## 42 【まよいが】

村にも町にもくわしい、完ちゃんが、  
「みちにまよっちゃまった」  
といました。  
こどものくせに、人生の道にまよったかと、呆れましたが、  
「ほんまに、まよったんじゃ」  
というから、ほんとうの道に迷ったのでしょうか。  
「まよって、どうしたんじゃ」  
「ちょうど、先のほうに、小さな家があったもんじゃから、道をきいて、  
ついでに、おにぎりでもくわせてもらおうかと、おもったんじゃが」  
「それはよかったのう」  
「おにぎりどころか、おかずも用意してあつてのう」  
「それはよかったのう」  
「しても、だれもおんから、かってにくつてのう」  
「それはよかったのう」  
「はらがいっぱいになったら、道もわかつてのう」  
「それはよかったのう」  
「そんで、次の日に、その家にお礼にいったんじゃが」  
「じゃがいも、もってかい」  
「さといも、もつてのう」  
「それはよかったのう」  
「それが、家がないんじゃ」  
「また、みちにまよったかのう」  
「こんどは、まよらん」  
「かいじいかのう」  
「かいじいじゃのう」  
というわけで、懐爺のところへ行きました。  
話をきくと、懐爺は懐爺らしく笑って、  
「完ちゃんはやかったですね。【まよいが】は、行き迷った人を助けるお  
ばけ。異界の家ですから、用事がなくなると消えてしまいます。【まよ  
いが】は、柳田国男という、えらいひとの、『遠野物語(とおのものがたり)』

という、有名な本にでてきます。【まよいが】は「迷い家」と書くそうですよ」

「けっこうなおばけじゃのう」

ぼくも行きたくていいました。

「でも【まよいが】は、行き迷ってもいないのに、凶々しくはいつてくる人間にたいしてはきびしくて、つぶれて下敷きにしてしまうんです」

「おそろしいおばけじゃのう」

行きたくなくなりました。

「なんか、人間にもそういうふうなひと、いそうですがねえ」

「そうじゃのう」

「そうじゃのう」

といいあいながら、完ちゃんとぼくは帰って行きました。